

小特集 農村の風土と歴史・伝統・文化

特集の趣旨

新基本法は、対象を農家から国民全体へ拡大すると共に、基本理念として農村の振興と多面的機能の発揮を掲げています。平成13年6月には土地改良法も改正され、環境との調和への配慮や地域との連携の強化が盛り込まれました。今後、地域住民の参画の下に新たな農村の風土が構築され、これによって農村が振興され、多面的機能の発揮に繋がることが望めます。すなわち、地域住民自らが地域の風土に関心を抱き、その歴史・伝統・文化を振り返ると共に、この上に立って新たな風土を創造・形成していくことが望まれています。

そこで、第71巻3号では、「農村の風土と歴史・伝統・文化」をテーマに、農村の風土の形成やその将来のあり方、あるいは現在に引き継がれている農村の歴史・伝統・文化やそれを継承するための地域での取組、さらにはこれらを踏まえた新たな地域づくりへの取組等に関する研究成果、事例報告をもとに、特集を組むこととしました。農業土木のみならず、社会学や民俗学の分野の識者にも執筆いただきました。

農村社会における「水土の知」について、農業土木関係者のみならず広く一般に浸透することを願うものであります。

1. 水土と語られた歴史

広瀬 伸

地域づくりにおいて、地域の歴史・伝統・文化への理解を深め、地域のアイデンティティを確立することは重要である。その担い手の維持・形成にとって、「語り」は共通の集合的記憶を維持・形成するために有効なメディアとなる。本報では、青森県の津軽・南部両地域での龍蛇と鬼を巡る各種の伝承、特に伝説を手がかりとして、農業水利の基層にあって地域の人々がそれに託した心意の解明を試みる。

(農土誌 71 3, pp. 5~10, 2003)



水土, 歴史, 文化, 地域資源, 伝説, 水利伝承, 田園空間

3. 歴史的農業水利事業を発端とする祭りの現状と参加者意識

緒方 英彦

農村には、農業に関わる歴史的な事件などを発端とする祭りが数多くある。この祭りは、地域住民が祭りの発端となった歴史的な事件を通して、地域の風土に関心を抱き、地域の歴史を振り返るための機能を有している。農村の祭りがその機能を十分に発揮し、かつ伝統行事として継続されるためには、当事者である地域住民の祭りに対する意向を調査しておく必要がある。そこで、歴史的農業水利事業を発端とする祭りの一つである鳥取県八頭郡家町家地区の安藤祭りの現状を調査し、あわせて参加者意識を調査することで、農村の祭りが有する機能が十分に発揮されるための要因を検討した。

(農土誌 71 3, pp. 15~18, 2003)



歴史的農業水利事業, 農村の祭り, 伝統行事, 祭りの機能, 参加者意識

2. 日野の用水を総合的な学習に生かす

小坂 克信

平成14年8月1日のとうきゅう環境浄化財団のワークショップでの報告について記した。

小学校4年生の総合的な学習の実践をもとに、身近な環境である用水に、児童が興味・関心をもち、体験的な調べ活動を通して用水のよさを知り、それを伝えられるような教材づくりをめざした。教材づくりにあたっては、児童の学習課題に応じたものや学ばせたいものを中心に作成した。ここでは、そのうち「日野用水と日野の煉瓦」、「水車では、どうやって玄米を白米にしたか」の2つの事例を記した。

(農土誌 71 3, pp. 11~14, 2003)



日野用水, 総合的な学習, 煉瓦, 水車, 教材化

4. 農業水利施設に関連する農村伝承文化の実相と機能

山下 裕作・山本 徳司

農村の文化は、地域住民が日々の「暮らし」において周囲の環境を認知(意味づけ)し、それを世代から世代へと伝え受け継ぎながら構築した伝承文化である。それゆえ「暮らし」の実態に応じた多様性と、その多様性を総合化する連鎖性という実相と、地域の「暮らし」を支える実践的な機能性を有していた。また農業水利施設は、地域の「暮らし」の環境を整備し、支え続けている重要な要素である。そのため、やはり伝承文化の文脈にもきちんと位置づけられており、伝承文化のもつ機能により保全されてきた側面が見受けられる。現在こうした伝承文化は失われつつあるが、現代農業の諸問題の解決に資する可能性は大きく、急ぎ保全することが望まれる。

(農土誌 71 3, pp. 19~24, 2003)



農村文化, 農業水利施設, 伝承, 環境認知, 暮らし, 文化の実相, 文化の機能

5. 遺跡保存整備による農村地域活性化への提言

油川 文子・登尾 浩助・広田 純一
石崎 武志・津嶋 知弘

日本における遺跡保存や史跡活用の事業展開では、整備後の入場者数の減少、催事企画内容の貧困などのさまざまな問題を抱えており、史跡を活用した農村活性化や村おこし事業は難しい。また、地域の活性化のためには、地域住民の協力が必要不可欠であり、積極的な住民参加が求められる。そこで、地域住民と事業整備のかかわりに着目し、一般の人の史跡活用に対する考えおよびさまざまなイベントの評価を行うためのアンケート調査を行い、農村活性化や村おこし事業に活用できる史跡活用の方法を提案する。

(農土誌 71 3, pp 25~28 2003)



史跡活用, 遺跡保存, 農村活性化, 村おこし, 住民参加

6. 地域の良好な風土形成とソフトデザイン手法

速水 洋志・池本 幸一・磯貝 洋尚

日本の農産物には、かけがえのない付加価値が備わっている。それは、農産物を育む農村地域の環境であり、風土である。山地秀麗な景観、地域の土壌と名水、歴史文化と感性が醸し出す村の空間、これが地域独特の風土である。このような地域の歴史・伝統・文化を掘り起こし、地域整備計画あるいは土木施設の計画、設計に展開していく手法として、近年「風土工学」が確立されてきた。

本報はこの「風土工学」の概要を示すと共に、「風土工学手法」を用いて、命名のソフトデザインを行った岐阜県でのダムの事例および本手法を農業農村整備事業への適用を提案することにより、今後の農村の振興と多面的機能の発揮に繋がることを期待するものとして、まとめた。

(農土誌 71 3, pp 29~32 2003)



風土, 風土工学, 風土資産, 地域資源, ソフトデザイン, 命名

7. 山形県における高齢化時代の農村風土と景観

長岡 正一

山形県の農村の風土と景観については、英国人女性が120年前に日本を旅行し、特に印象の強い地域を「日本奥地紀行」に著している。景観や歴史の変遷から、置賜地域の散居集落、村山地域の集居集落、最上地域の山村集落の特徴的な3形態に大きく分類される。置賜は、豊かな自然環境と勤勉な農家の風土からアジアのアルカディアと賞賛されている。村山は、楽しく愉快な地域で先進的産業の一部に農業も位置づけている。最上は、厳しい自然の中でも積極的な営みによってロマンチックな雰囲気の場所となっている。農村風土と景観は、地域住民の独創的アイデアと弛まぬ努力により、世代を超えて脈々と受け継がれるべき貴重な財産である。

(農土誌 71 3, pp 33~36 2003)



農村風土, 景観, 高齢化, 集落形態, 中山間地域, 有機無農薬農業, 生涯学習

8. 農業用水の文化資産形成とまちづくりによる農村風土の創造

中村 好男・増野 途斗・今井 良介・左村 公

群馬県雄川堰用水は地区の上流部では城下町を潤し、下流部では水田を潤す文化的資産として維持管理されてきた。昭和60年には地域住民による水環境保全活動が評価されて日本名水百選に認定された。このことが契機となってさまざまなまちづくり事業や水環境整備事業が展開され、住民の水環境保全意識の向上に大いに貢献するところとなった。一方で有機農業の展開が図られ、東京北区との交流によってコンポストを活用した堆肥づくりも進められ資源循環型農業が確立した。城下町での良好な水環境の維持が安全で安心感のある農業イメージにつながり、体験学習館の整備によってグリーンツーリズムも盛んに行われるなど、地域資源を活用した新たな農村風土が創造されつつある。

(農土誌 71 3, pp 37~40 2003)



農業用水, 文化資産, 名水百選, まちづくり事業, 有機農業, 資源循環型農業

9. 北海道の風土と地域住民参加による農村の活性化

森瀧 亮介・木村 尚光・芦口 幸弘・千賀裕太郎

北海道の農業・農村は、その歴史はわずか130年と新しいものの、自然条件、歴史的発展過程、農業生産活動形態等により、各々特色のある風土を形成している。これらの独特の風土は、歴史的に蓄積された田園空間の生活や文化的価値を反映するものであるとともに、これらを保全・創造させることが地域の活性化に重要なことである。

本報は、ケーススタディをとおして、農村風土が形成されてきた歴史的経過とこれらをもとにした地域活動について分析を行い、今後の農村風土を継承・発展させていく方向性を示すことにより、歴史的連続性を基本とした地域の風土の継承・活性化の一助に資することを目的とする。

(農土誌 71 3, pp 41~44 2003)



風土, 田園空間創造, 住民参加, 地域活性化, 交流, 北海道

10. わが国の風土と土・水資源の保全

友正 達美

わが国の農地、農業用水等の農業資源の保全について、わが国の風土の特徴との関係を概観し、今後の課題を展望する。耕作放棄による荒廃は植生によるバイオマスと豪雨等による流水を主な動因として発生するが、これらは同時に農業生産上の資源でもある。伝統的な農業・農村は、この正・負の二面性を一体的に処理する仕組みを通じて農業資源を保全してきた。今後、農業と農村の変化に対応した農業資源の保全のためには、一体的処理を生かした農地の粗放管理および水利施設の更新を行うと共に、資源保全の負担を多面的機能の受益者で広く負担する社会的な仕組みを構築することが必要である。

(農土誌 71 3, pp 45~48 2003)



風土, 農業資源, 農地, 水利施設, 耕作放棄, 荒廃, 多面的機能

11. 地域景観と地域の色を生かした農村整備

大野 研・北谷 康典・稲垣 匡顕

地域の土の色は、含水比等に影響を受けるが、一定の光源の下では比較的安定した地域色の指標となる。また良く知られているように、土壌学の分野では、土の色は最も古くから土壌の特徴を表す代表的な指標とされ、土壌色の測定が修正マンセルカラーシステムに基づいて行われてきている。また、ある視野内の色彩の平均値は、地域で産出した材料でつくられたような伝統的な町並みを持つところでは、自然環境のみならず人間の営みをも反映した風土を表す色の代表値となる可能性があると考えられる。そこで、実際に三重県内で土の色の測定とある視野内の色彩の平均値を計算した。地域の色彩の分布を把握して、地域ごとに地域の自然と調和した色彩で、農村構造物の景観を統一することが、風土を生かした農村整備に重要であると考えられるからである。

(農土誌 71 3, pp 49~53 2003)



農村整備, 地域景観, 地域の色, 土, 画像解析, フラクトラル

12. 良質米を育てた宮城の米作りの風土

千葉 克己・田村 孝浩・鈴木 浩之

今日における米どころ宮城は、伊達政宗の食料戦略により始まり、良質米「ササングレ」の誕生という3世紀以上にわたる歳月の中で築きあげられてきたものである。その歴史をふり返ってみると、今日の宮城における良質米は、土地改良、品種改良、そして農民の魂が共同で創りあげた代物であることがわかる。土地改良は、米どころの土台を創り、近代はその質的な改善を図った。農民たちは、稲作には不利とも言える冷涼な気候に苦しめられながらも、その土台を継承し、優良品種の誕生を待った。本報は、宮城が良質米を大量に生産する真の米どころになるまでの道程を、土地改良、品種改良そして農民の魂に焦点をあてながら述べる。

(農土誌 71 3, pp 55~58 2003)



新田開発, 耕地整理, 治水, 品種改良, 宮城米, 良質米, 冷害

13. 農村文化のシンボルとしてのホタル保全活動の展開

三宅 康成・松本 康夫・水谷 仁

水田農業を基盤とした農村地域において、かつて文化の象徴であったホタルの保全活動を対象として、活動の展開状況を明らかにした。具体的には、全国における先進事例と岐阜県内の事例を調査対象として、保全活動の種類と内容、活動組織の構成、活動内容など保全活動の現状を概観した。さらに、先進事例として滋賀県山東町、滋賀県守山市、一般事例として岐阜市の事例を取り上げて、活動の契機、経緯、活動状況などの現状を詳細に紹介するとともに、保全活動の問題点と今後の展開方向について言及した。

(農土誌 71 3, pp 59~62 2003)



ホタル, 保全活動, 水辺環境, 地域住民, 水田文化

(講座)

農業土木技術者のための生き物調査(その7)

淡水魚調査法

斉藤 憲治

水田と農業水路周辺の淡水魚の生息環境と農地の開発・整備事業とを共存させるためには、どんな種類がいつどこにいるのかということだけは最低限知っておく必要がある。そこで、水田と農業水路周辺の水域における淡水魚の分布とその季節的変化の調査について解説する。さらに、繁殖や移動・分散など淡水魚のさまざまな生活実態の調査についても若干の解説を試みる。調査対象魚種の多くは水田耕作にともなう水位変動と水域の拡大縮小に対応して刻々と出現場所を変えるので、調査スケジュールは水田耕作と水門操作のカレンダーに依存して計画されるべきである。

(農土誌 71 3, pp 63~67 2003)



淡水魚, 水田地帯, 調査方法, 一時的水域, 恒久的水域, 自然再生

複写される方に

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、(社)日本複写権センターと包括複写許諾契約を締結されている企業の従業員以外、著作権者から複写権等の行使の委託を受けている次の団体から許諾を受けて下さい。著作物の転載・翻訳のような複写以外の許諾は、直接農業土木学会へご連絡下さい。

〒107 0052 東京都港区赤坂9 6 41 乃木坂ビル

学術著作権協会 (TEL : 03 3475 5618 FAX : 03 3475 5619) E-mail : kammori@msh.biglobe.ne.jp